

表現は思いがけないものとの出逢い

# AUTHOR'S

5

MAMUKAI  
BOOKS GALLERY



猪野 修治

五十嵐秋子

太田 和彦

酒井 佐忠

志治美世子

鳥居 明雄

星莖 恵子

向井 楨

山田 邦紀

山本美智代

吉村 久夫

# 実践的な在野学の冒険—湘南科学史懇話会の活動

はじめに—湘南科学史懇話会とは

私は、1960年代後半のベトナム反戦と大学闘争の時代、某国立大学の研究所を自主退職し、数年後、都内私立高校に職を得て、以後長く物理教育に関わってきました。一方で、市民に開かれた学びの場「現代思想史研究会」を立ち上げ（東京、1996年3月）、その2年後には開催場所を湘南地域に移して、名称を「湘南科学史懇話会」と改めました（1998年5月）。したがって、当懇話会は実質的に今年で20周年の節目を迎えました。

湘南科学史懇話会は、現代科学技術と科学技術史のもろもろの問題を、話題提供者と参加者が十分に時間をとり、自由に議論・交流する場です。狭い学問領域にとらわれず、多様な職能をもつ広範な市民・労働者・研究者・学生が自由に議論すること、参加者はゆるやかな共鳴関係を保ち、それを尊重し、さらなる共鳴関係を創ることを目的としています。また、いかなる会則も定めない、“一期一会”のきわめて気楽な研究会です。

言わばアカデミズムの独占的知的学問形態を解放し、市民主体の知的学問形態を創ろうとするものです。参加者はおもに湘南地域にお住まいの方々ですが、テーマによっては遠方の方々も、度々参加されています。各回の参加者数は、名実ともに“一期一会”の気楽な研究会のため、当日にならないとまったく予測できません。これまでの経験から言えば20～30名くらいです。

その20年の活動の中から、5つの事例をあげ、主宰者の私自身の取り組みを紹介したいと思います。

## 1 壮大な人類8000年の文明史

湘南藤沢市に住んだ思想家に、いいだもも氏（1926～2011）がおられます。いいだ氏は晩年、まさに枕のような部厚い大著を何冊も刊行されました。その中に『〈主体〉の世界遍歴—八千年の人類文明はどこへいくのか』全Ⅲ巻、2655頁（藤原書店、2005年11月30日）があります。この大著は同氏から寄贈されたものです。

ちょうどこの時期、教職を退いたばかりの時期だったので、渡りに舟とばかり、この大著の読み込みに取りかかり、あけてもくれても、この大著と格闘したのです。まさに、目もくらむような内容でした。これを読みながら、まだまだ読み込み途中の段階ではありましたが、この大著の概要を理解するにはどうしてもご本人に当懇話会でお話をいただかなくてはと思ひ立ち、いいだ氏のご自宅に伺いました。いいだ氏はその場で快諾してくださいました。

こうして実現したのが、第45～48回（2006年）の4回に及ぶ連続講演でした。第1回目

は「今日における主体の危機と主体再生の展望について」（5月7日）、第2回目は「古典古代ギリシア文明とは何であったのか？」（6月4日）、第3回目は「地中海世界のミノア・ミューケーネ文明とは何であったのか？」（7月2日）、そして、第4回目は「古代ローマ世界帝国の興隆と没落」（8月6日）でした。

この連続講演は毎回、多数の参加者のもと、討論をふくめ4時間におよぶものでした。その詳細な記録は『湘南科学史懇話会通信』第14号（2007年）として刊行（自費出版）しました。この通信は、その編集に1年の時間を要した苦心の作品ですが、これに没頭した時間は、まさに青春そのものようでした。

## 2 明王朝から清王朝の激動期に生きた知識人・栄応星の著作『天工開物』の研究

第65回（2013年11月16日）には、渡部武氏（中国文化史、東海大学名誉教授）をお招きし、「『天工開物』の書誌学的研究—三枝博音氏の研究継承の試み」という講演をお願いしました。

『天工開物』とは、17世紀初頭に栄応星（1587～1666?）が、当時の中国の農業・養蚕をはじめ製塩・製陶・製紙・鋳物製錬などについて、挿絵を挿入して具体的に描いた産業技術書です。日本では、1771（明和8）年に、大坂で翻刻され流行しました。その後『天工開物』は、中国科学史家・藪内清氏の研究により知られることとなります（藪内清訳注、平凡社東洋文庫、1969年）。

この『天工開物』に、科学史の観点から本格的にメスを入れたのが科学史家・三枝博音氏（1892～1963）でした。周知のように三枝氏は、西洋と東洋の科学・技術に関する先駆的な業績をあげた研究者でした。

渡部氏には、この三枝氏の広汎な研究をふまえて、新たな栄応星の人物像を語っていただきました。渡部氏の『天工開物』の講演に刺激されて、私はこの書物も紹介している中国科学技術史研究の巨匠、ジョゼフ・ニーダム（1900～1955）の壮大な大著『中国の科学と文明』全11巻（新思索社）を完読することになりますが、これまたシンドイ読書を自らに課すことになりました。

この過程で、思わぬ人物との遭遇もありました。フランチェスカ・ブレイ『中国農業史』（古川久雄訳、京都大学学術出版会、2007年）の著者の消息にまつわる話です。中国古代農業史の女性研究者であるブレイは、1985年、パークレーの国際科学史会議で会ったことがあり、その後の動向が気になっていたのですが、渡部氏はベイと旧知の関係だったので、『中国農業史』の日本語訳を査読する仕事に深く関わられたことを知り、不思議な縁を感じて驚きました。

## 3 近現代の自然・人間の総体を、根源的に問い直す安藤昌益の研究

20 世紀の後半から、環境問題に世界的な関心が向けられ、日本では江戸中期の思想家・安藤昌益（1703～1762）の実践的な思想に関心が高まっています。自然思想にとどまらず、社会思想・医学論・音韻言語論を展開し、今世紀ますます世界的に注目されている思想家です。画期的な『安藤昌益全集』全 21 巻+別巻 1（22 分冊）+増補篇 3 巻（農文協）が完結したことが、その証です。

農業を中心に人間と自然のあるべき姿を示した安藤昌益ですが、その研究に 40 年以上も没頭している東條栄喜氏（科学史）という方がおられます。

東條氏はもともと、東京大学原子核研究所で加速器・イオン源などの開発に従事する科学技術者です。その科学技術の最先端の世界にいる同氏が、それと並行して安藤昌益の研究に一貫して関わっていることに、たいへん興味を抱きました。安藤昌益の著作の学問的核心を忠実に再構成して論じた重厚な『互性循環世界像の成立—安藤昌益の全思想環系』（御茶の水書房、2011 年）を書かれています。

その東條氏の研究論考を紐解くと同時に、この際、思い切って、先の『安藤昌益全集』全 21 巻の読み込みを開始しました。その苦行にも似た読み込みと思索の日々は、延々と続きました。その読み込みと思索の上に、同氏をお招きし、第 67 回の湘南科学史懇話会（2014 年 3 月 2 日）で、「安藤昌益の循環思想と自然概念」を語っていただきました。

現在の大館市に生まれ八戸市に出て医師になった昌益は、自然破壊に手をそめる人間のあくなき欲望の実態を見た後、自然（農業）に寄り添う自然思想家として、あらゆる封建的身分制や伝統的思想家を徹底的に批判しました。その壮絶とも言える徹底的な批判は驚愕するばかりです。そこで語られる昌益ならではの独特な自然と人間の見方には、圧倒されるばかりでした。

#### 4 孤高の中国古代政治学者・中江丑吉の研究

中江丑吉（1889～1942）は中江兆民の長男として大阪に生まれ、東京帝大法科大学政治学科を卒業し、1915 年夏に中国に転居し、市井の孤高の学者として、30 年の北京生活をした稀有な思想家です。

1919 年の五四運動のさい、政治家の曹汝霖や章宗祥を救い、また、中国古代政治思想や資本論などを独学で研究した人物です。とくに没後に弟子たちによって編まれた『中國古代政治思想』（岩波書店、1950年）は、画期的な労作と評されています。

あまり知られることのないこの孤高の思想家に光をあて、長年、中江丑吉の学問と生き様に心酔している竹中英俊氏（編集者、元東大出版会常務理事）に、「中江丑吉・市塵の思考者について」なる講演をしていただきました（第73回、2015年6月6日）。

実は、この講演の前後から、中江丑吉の生き様に想いを寄せた私も、中江丑吉の著書と研究書を手当たり次第に読み込みました。とくに丑吉が原典で、何度も繰り返し読んでいたマルクスの『資本論』全 3 巻の講読のしかたを見習い、音読する日々が続きました。そ

れに続けて、カントの『純粹理性批判』の原典音読も終えることができました。

在野で学ぶ人間には、西欧の書物を原典で繰り返し読み、その一方で古代中国の政治思想の研究に専念し、しかし、いかなる社会的な評価も名声も求めなかった丑吉の学問スタンスは大いに学ぶべきことがあり、身が引き締まる思いをしました。それを実践する日々は至福のときでした。

## 5 科学的・実証的に解析し、可視化する地球規模の放射能汚染の実態

3・11以後、東日本大震災に伴う福島原発事故による放射能汚染は、日本国内にとどまらず地球規模の海洋汚染をもたらしています。この海洋・湖の汚染を研究する海洋物理学者・湯浅一郎氏（ピース・デポ副代表）に、「海の放射能汚染を考える―福島事態を文明と欲望を問い直す契機に」なる講演をお願いしました（第77回、2016年3月27日）。科学的な分析による実証的研究には、目を見張るものがありました。

湯浅氏は、「人類は、自然は無尽蔵であると勘違いし、海をゴミ捨て場とみなしてきた思想を改め、産業革命以降の人類の歩みを省察すべきである。〈これ以上、海を毒壺にするな〉という海のうめき声に真摯に向き合い、現代文明の脆弱な社会構造を振り出しから見直すべきこと」を提唱されました。

その他にも「世界の核被害の現場から」（豊崎博光、第42回）、「グラムシの科学論とグローバル化の時代」（片桐薫、第51回）、「サルトルと情報公開」（梅林宏道、第52回）など、たくさんの講演と討論がありますが、ここでは語り切れませんので、詳しくは湘南科学史懇話会のHPをご覧くださいければ幸いです。

## 6 おわりに―懇話会を主宰する基本的な精神

1980年9月、物理学者で科学史家の山本義隆氏が、当時、高田馬場にあった「寺子屋」で行っていた勉強会に参加して以来、私は水を得た魚のように、同氏の書物を読み込む日々を続けてきました。

昨年、同氏は、『知性の叛乱』（前衛社、1969年6月）以来、46年の時間を経て、自伝的色彩のある『私の1960年代』（金曜日、2015年10月）を刊行しました。多数の読者を得て大きな反響を呼んでいます。この二つの書物が刊行される46年間の私の生活史を振り返ると、非常に感慨深いものがあります。この間に刊行された同氏の多数の書物を読み込むことで、はかりしれない学問的栄養をいただけてきたからです。

こうして山本氏から受けてきた長年の学問的栄養が、懇話会を主宰する私の精神的支柱になっていること、また、その学恩になんらかの形で応えなくてはならない、という強い思いがあることは事実です。このように続く悪戦苦闘は、私なりの実践的な在野学の冒険

であるのかもしれませんが。

猪野修治（いの しゅうじ）

1945 年山形県生まれ。東京理科大学理学部卒業。都内私立高校教諭を経て、現在は湘南地域で市民主体の学びの場「湘南科学史懇話会」を主宰する。著書に『科学を開く 思想を創る—湘南科学史懇話会への道』（つげ書房新社）、『サイエンス・ブックレビュー』（閏月社）などがある。趣味は読書と箱根温泉探訪。湘南科学史懇話会代表。

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/shonan/home.htm>